

園芸新知識 今月の表紙

今時のピーマン

街を行き交う若者たちのカラフルなファッション。野菜売りのファッションリーダーは、差し詰めパブリカでしょうか。かつては子どもや若者から敬遠されることが多かった緑のピーマンも、パブリカがイタリアンをはじめとした食材で使われる中、もともと健康的な緑のピーマンも抵抗なく受け入れられているのではないのでしょうか。もちろんピーマン自体も、確実においしくなっています。「京鈴」は低温期の着果性に優れ、濃緑で店もちのいいものが栽培全期間を通じて収穫でき、おすすめします。



太陰  
太陽暦  
に見る

暦と生活  
今昔

いむかし

水無月

みなづき(6月)

6月の暦と生活

【芒種】6月5日【夏至】6月21日

芒種とは稲などのタネをまくころ、という意味です。太陽が高く昇るようになり、夏至ではそれが最高となって、昼間の時間も一番長くなります。梅雨入りすると、一雨ごとに暑さが増していきます。

「タネをまく」といっても、実際には田植えをさせているのでしよう。昔は今と違って水苗代で苗を作っていたため、田植えの時期は多少遅く、6月中旬ごろとなりました。今も昔も、農村が非常に活気づく時期です。

平安朝の行事

【大赦】旧6月30日 知らないうちに犯してしまった罪や穢れを、半年ごとに洗い清める行事で、6月末に行うのは「夏越しの大赦」といいます。この日は、朱雀門に皇族らが集まって大赦詞というものを唱えたり、また、紙を人の形に切り抜いたものを川に流すなどしていたようです。

この行事は中世に一時衰退しましたが、現代は復興されて、各地の神社などで行われるようになっていきます。

地方のお祭

【チャゲチャゲ馬】6月11日

若手県滝沢村の蒼前神社から盛岡八幡宮まで、色とりどりに着飾った100頭近くの馬が、鈴の音を鳴り響かせながら行進するお祭です。

この地方は古来より馬の産地として知られ、農耕に使われるようになると、農民が馬とともに蒼前神社にお参りする風習が生まれました。そのうち、馬具に趣向を凝らし始め、中には大名から拝領した装束をつける飼主も現れて、これが祭のもともとなりました。

馬が歩くたびに鳴る鈴の音は、「残したい日本の音風景百選」にも選ばれています。

【京都鞍馬寺竹伐り会式】6月20日

平安時代に、鞍馬寺の峰延和尚が、2匹の大蛇を祈禱によって退治したことに由来しています。その時、雄蛇は切り殺したのですが、雌蛇は許して、山に水を湧き出させるよう命じたところ、それを守ったので祀るようになったということです。

竹伐り会式では、法師たちが東西に分かれて蛇に見立てた竹をたたき切り、その速さを競います。東を近江地方、西を丹波地方とし、勝つ方がその年は豊作になるとされています。



直売所で人気沸騰!  
バイオダルマで作った野菜が注目!!

島根県JA雲南では17の直売所で約5億円の売り上げがあります。安心・安全・新鮮が目に見える一味違った野菜で、買い物客に人気を呼んでいます。作り手は農家の元気な中高年おばさんたち。長年の経験が積み重なった自信作が並び、野菜一つひとつに出荷者の名前とバーコードがついています。

この直売所で売られているこだわり野菜の栽培には、出雲にある(株)田中種苗のすすめでバイオダルマが使われており、人気の秘密となっています。

バイオダルマは完熟堆肥と肥料分を合わせた菌体特殊肥料で、この中に配合されているダルマ菌(有用土壌微生物)が土の若返りや連作障害緩和など、さまざまな効果を発揮します。ダルマ菌の作り出す代謝物は、土の団粒化を促進して、かたい土をやわらかい土壌に変身させます。また、植物の根毛の発生を促し、健康な生育を促します。さらに、高温・乾

燥に強く長い間土壌中に生存し、有害菌と拮抗して害作用を抑えつけ、健全な土壌環境づくりに役立ちます。

なにより、バイオダルマを使った野菜は日もちがよく、色合いのよさや自然なおいしさが顕著に出ると、生産者や消費

者にも好評です。ぜひバイオダルマを元肥として試してみてください。施されたこの肥料が底力となって、雨にも風にも、夏の暑さにもまけない野菜作りをサポートしてくれるはずですよ。



バイオダルマで作った、鮮度・色合いのよい野菜が並ぶJA雲南の直売所。



バイオダルマ(10mm以下)

「バイオダルマ」の販売については「2005年 夏秋 野菜ガイド」79頁をご参照ください。